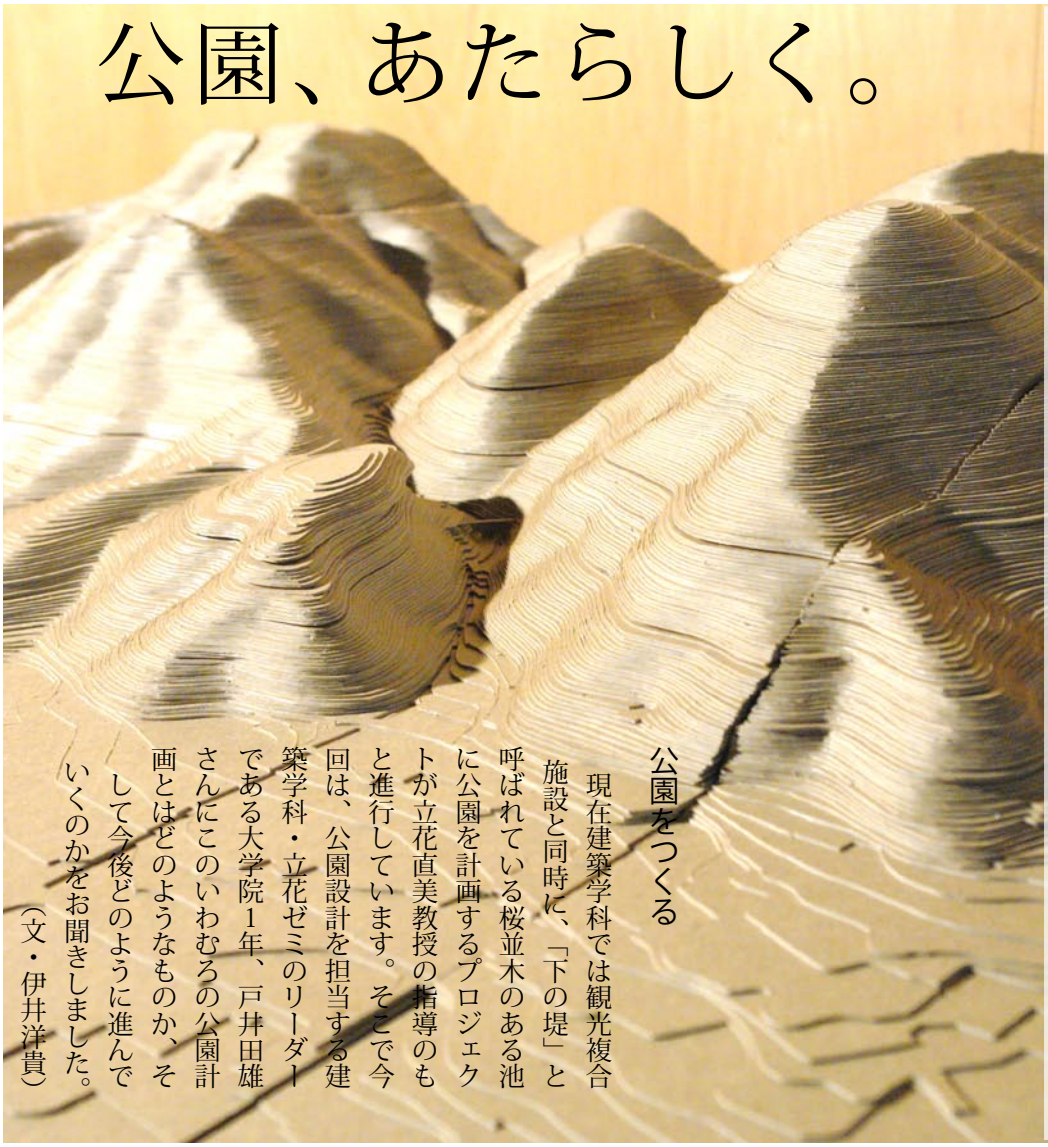
公園、あたらしく。



いわむろのみらい新聞

第４号

２面
観光複合施設チーム
中間発表会／直前発表
６面
アートサイト近況報告
７面
コアコンセプト経過報告
８面
ムサビの風景（第２回）

公園をつくる

現在建築学科では観光複合施設と同時に、「下の堤」と呼ばれている桜並木のある池に公園を計画するプロジェクトが立花直美教授の指導のもと進行しています。そこで今回は、公園設計を担当する建築学科・立花ゼミのリーダーである大学院１年、戸井田雄さんにこのいわむろの公園計画とはどのようなものか、そして今後どのように進んでいくのかをお聞きしました。

（文・伊井洋貴）

環境から読み取る

私たち公園設計チームは、建築学科・立花教授のゼミに所属する大学院生1名と学部４年生 ４人のメンバーで、今回「下の堤」と呼ばれている場所の公園設計を行っています。

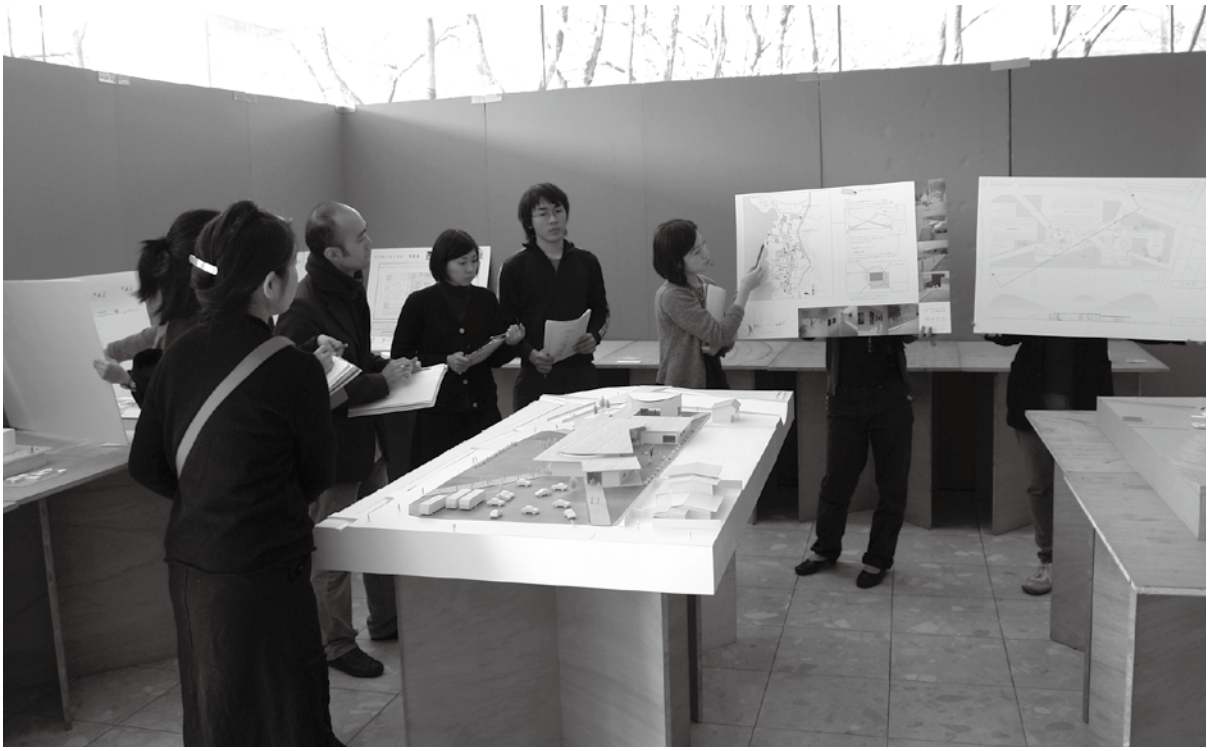
立花ゼミは「環境」をテーマに学んでいる学生が多い事が特徴です。幅広い意味を持つこの「環境」という言葉ですが、岩室の地形や気候という「地理的な環境」、植物や昆虫を守る「環境の保護」、温泉街の町並みや雰囲気を考える「景観としての環境」といった各自が大切だと感じる要素を岩室から抽出し、設計を行っています。

これらの環境を知るために、現在大学では岩室の街が一望出来る巨大な模型の制作およびリサーチ、古地図から時代とともに変化した土地利用のあり方、植生などを読み取るといった取り組みを行っています。

22日に行われるの最終発表を控え、皆今まで調べた事から、各自の具体的な計画案をまとめている状況です。学生の様々な視点から、新しい「いわむろのみらい」が垣間見えれば幸いです。

（文・戸井田雄）

▲鋭い眼差しの立花直美教授



11月24日（金）

in ムサビ

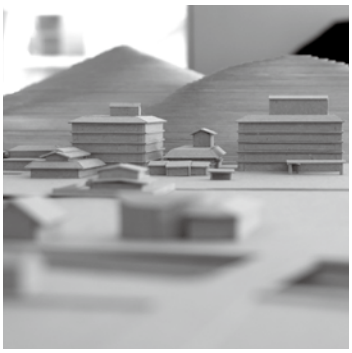
［公開中間講評会］

観光複合施設チーム
学内公開プレゼンテーション。
他学科のムサビ生も興味津々です。

ムサビへ向けて

観光複合施設チームの中間講評会が学内への公開形式で行われました。7グループそれぞれが当初のイメージを具体的な建築の形態や施設内外における機能・用途の配置に落とし込み、発表に臨みました。講評の際は各案に対して、物産展や足湯の規模、配置、構造や採光などの要素に対して講師陣からの鋭い指摘がなされました。また公開形式のため、いわむろプロジェクトの認識がムサビ内において上がったという事も収穫の一つであったと思います。

（文・赤松慎太郎）



最終発表に向けて

建築学科・高橋晶子教授

11月28日、岩室にて観光複合施設の中間報告を行いました。

模型は縮尺100分の1にスケールアップされて1メートル20センチを超え、タクシーと新幹線で運ぶサイズの限界でしたが、内部もよくわかるものになりました。大きくなっただけではなく、各グループは非常にがんばって作品を作っています。一つのアイデアの陰に、「没」になったものすごい数のスタディが実は隠れています。基本設計が実際同時に進行している状況のなか、中間報告は、地元いわむろみらい研究会の方々、行政と設計事務所の皆さんを前にして行いました。

まず設計事務所の案が説明されたのち、ムサビの7つのグループの案を見ていただきました。7つの案はどれも「いわむろのまちとこの施設の関係」という点を強く意識しています。敷地の中だけでの平面・外観づ

11月28日（火）

in 岩室

［観光複合施設会議］

▲市役所の営繕課と観光課の方々

「そういう考えもあったんだ。」
そんな素敵な反応を
くださいました。

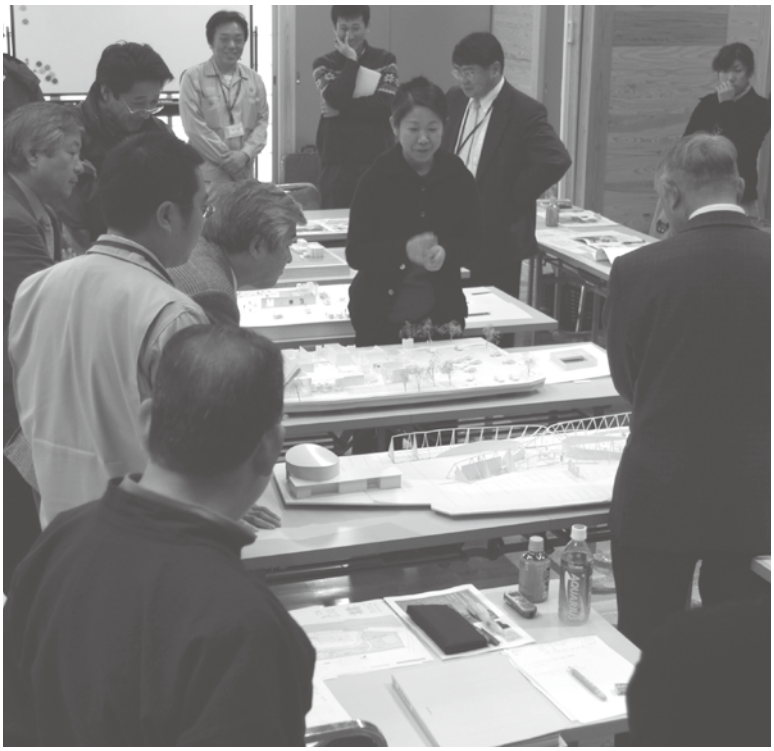
岩室での発表は実りあるものでした

岩室・伝承館にて、設計共同組合・新潟市役所・いわむろみらい研究会・武蔵野美術大学による観光複合施設会議が開かれ、本学からは中間提出された7案の発表を行いました。

まず施設の施工を請け負う設計共同組合の中村さんより、繁忙期と閑散期のシーズンによって使い分けができる施設に多目的利用のできる駐車場が併設された共同組合案の説明がなされました。

次に、高橋教授よりアイデアボードと模型で学生案の説明がありました。施設を散策回遊の拠点とする案から、隣接する田んぼに畦道を通したいというアイデアに対して、岩室の方々からは「私たちには当たり前の風景。そういう考えもあったんだ。」と、畦道が観光要素になるのかと驚きながらも微笑む場面もありました。

その後、用途や大きさ、建物のイメージに対して具体的な意見の交換が行われました。岩室の未来を担うこの施設を一体となって考え、取り組んでいこうとする雰囲気が印象的でした。（文・小倉壮平）



くりに終止するのではなく、周囲の山と平野の眺望や、ここから岩室散歩をする人の動き、この施設と温泉街との関わりなどを、解き語ろうとしています。

また、それぞれのグループが自由に「いわむろのイメージ」を考えて設計しています。いわゆる温泉旅館や日本の集落の伝統的外観をイメージにする方法もありますが、そうではない方法でもイメージは作ることができます。例えば、岩室は扇状地的な緩やかな傾斜が特徴的なので、建物内に緩やかな「地形」を作ろうとしていたり、はざかけの形がインスピレーションの源泉になっていたりという具合です。いわむろの「シンボル」として重要な位置づけになる建築のデザインを、各グループが今月18日（月）にどう提案するか、皆様お楽しみに。

実際の基本設計案とムサビの課題の成果が、具体的にどういう協同を生み出すのか、まだ予測がつきませんが、きっと皆さんに刺激とヒントを提供するものと信じています。

▲最終発表を来週に迎え、学生の表情も変わってきた。

12月01日（金）
in ムサビ
［直前発表］

制作は住境へ

12月1日の観光複合施設チームの講評会は、最終発表間近の緊張感の中、各グループの熱意をさらに強く感じるものでした。

中間発表から1週間が経ったこの日、各グループは一度まとめたコンセプトやそれに伴うアイディアを再び突き詰め、どうしたらより岩室に相応しい施設とすることが出来るか、また岩室のこれからにとって意味のある提案が出来ないかということを再考した様子でした。その結果、中間発表時の100分の1の模型を使ってさらに各用途ごとの場所の配置を詰めたり、屋根の架構と内部空間の関係を細かく検討するグループもあれば、スケッチを描いて建物の内外でどのようにこの施設が使われるのかを視覚化するグループもありました。また、自分達の案を見つめ直した結果、もう一度200分の1の小さいスケールにフィードバックしたり、あるいは大幅にデザインを変えて提案を出してきたグループもありました。

このように7グループそれぞれの想いを設計に詰め込んで、残りの1週間は、練り上げられた作品をいかに人に伝えるかという発表のための準備に取り掛かります。設計することと同じくらい重要なこの「伝える」という作業、最終発表に向けてラストスパートです。（文・赤松慎太郎）

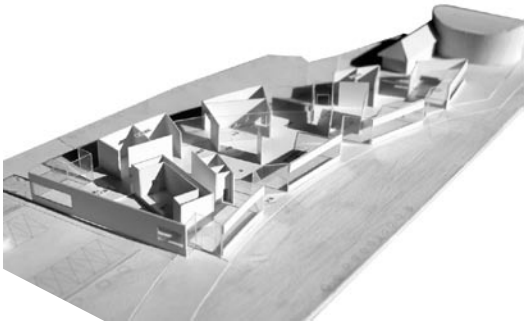
A

「イワムロサイクル」

観光客と住民の双方の関係を考えた施設。

今週のテーマ　山と結ばれた空間

核となる場所 " タマリ " をつくった。また松岳山方向に向かう放射状の壁で仕切ることによりフロアを共有しながらも意識的には独立した空間をつくった。

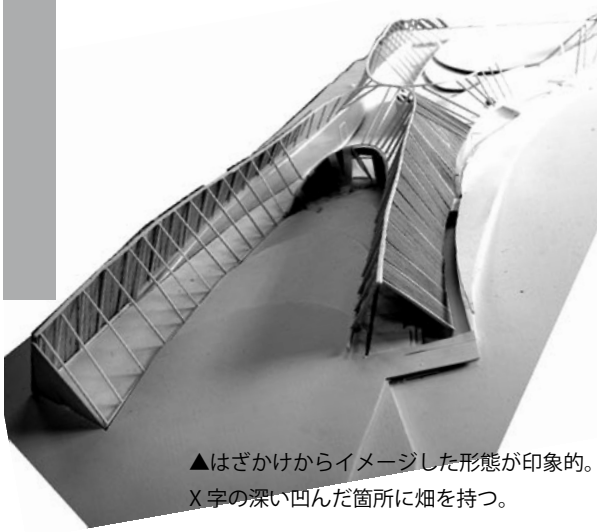


▲建物は松岳山に向かって緩やかに孤を描く。

B

「はざかけから」

敷地内に畑を設けてそこから採ってきたものを直接施設内で消化出来るプログラムを持つ。



▲はざかけからイメージした形態が印象的。X字の深い凹んだ箇所に畑を持つ。

今週のテーマ　建物の存在感を考える

建物のプランは変えないままに駐車場を目立たないようにし、かつ建物を浮かび上がらせるにはどうしたらいいか考え、結果駐車場以外の地面全体を30センチ底上げし、中心の入り口に向かって下がる傾斜をつけた。地面をゆるい浅いすり鉢状にすることによって真ん中の大空間に向かって意識が行き、建物に求心性を与た。

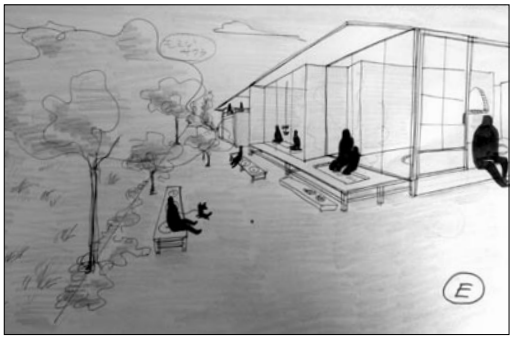
C

「おもてなしの街岩室」

体験を思い出にかえる
プログラムを考える。

今週のテーマ　空間イメージの落とし込み

どういう空間を作りたいかを再確認し、この場所でどういうことがなされるかを伝えるためにスケッチを重ねつつ、各空間の繋がり、建築内部と外部空間の繋がりなどイメージの落とし込み作業を行なった。また平行して建築との関係を意識した植栽計画を行なった。

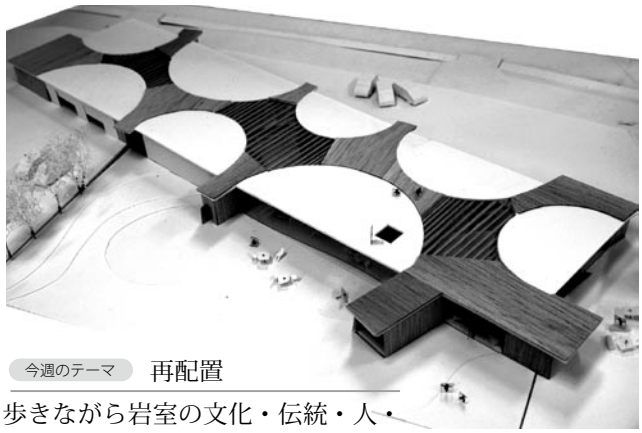


▲大きな箱の中に用途によった小さな箱で構成された建物。

E

「岩室さんぽ」

散歩道を新たに提示。夜間の導線計画や照明計画についても考慮した。



今週のテーマ　再配置

歩きながら岩室の文化・伝統・人・自然に直接触れ合うことのできる観光客にも地元の方にとっても歩いて楽しい散歩道の一部になるような施設を計画した。

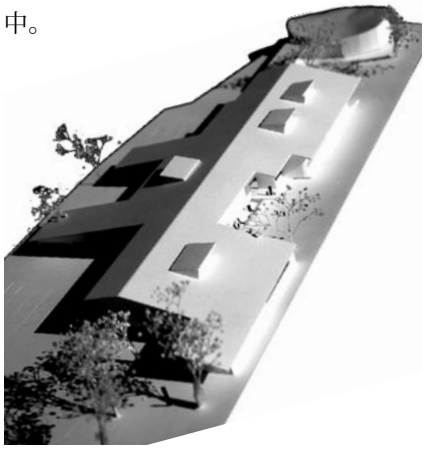
D

「みんなの家」

お招きされる家として、あるいは自分の家の延長という感覚で利用者に親しんでもらえる施設の提案。

今週のテーマ　靴のまま

靴のまま楽しめる土間空間の充実を考えた。板の間で土間を包むことや可動式キューブによる柔軟な空間を検討中。

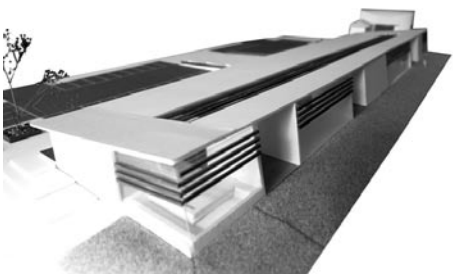


G

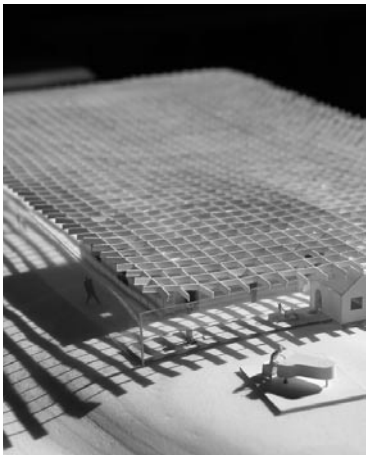
「直線の廊下」

今週のテーマ　開口部

同系統の建物を直線的に並べ一枚の屋根でつなげ、複合施設として各施設を一つにまとめた。施設南側に緑地や大きな開口を設けることで自然との一体感をねらった。



F



「観光客・旅館・地元の人」

観光客と地元の人が交われるような施設の提案。

今週のテーマ　最終調整

足湯、機械室、起伏を調整。屋根はグリッドにし、採光もグリッドから確保。さらに丸柱をたてることで空間を引き締めた。

▼▼▼ 次号いよいよ「最終発表」

期間は来年３月２日から３月11日までの10日間！

アートサイト岩室温泉2007

▲アートサイト岩室温泉 2005 より

企画はどんどん進行中。

現在、本格的にアートサイトが始動しています。イベントなどの企画運営を行う私たちアートサイト・マネージメント班は様々な企画の目標設定を終え、より実行価値を高められるよう案出しを重ねつつ討議している最中です。そしてムサビ全11学科の研究室や学生との連絡を円滑にするため、告知のチラシ作成や本番へのスケジュール確認に飛び回っているところです。

内容が深まっていくにつれ、岩室の方とお話したい事、目で見て確認したい事も増えました。今度の視察・プレゼンに向け気合十分で動いています！

（文・長秀治）

▲ アートサイトを担当する芸術文化学科のゆかいな学生たち。

検討中の企画を少しだけご紹介！

[オープニング・クロージングパーティ]
映像を制作するほか、サンバ隊、芸妓さんの舞台など、様々な催しものを企画中。

[有料イベント : ファッションショー]
岩室の方々をモデルに起用する予定です。芸妓さんとストリートダンスのコラボも !?

[無料イベント]
AS を盛り上げるイベントを多数企画中。

[ワークショップ]
「妖怪妖精図鑑」…岩室に住む妖怪・妖精を想像し様々な素材で再現してもらう。
その他に「太鼓でセッション」「秘密基地を作れ」「踊る魂岩室」など妄想中。

チラシ決定！

11月27日、岩室・伝承館にて２度目となるアートサイト岩室温泉２００７チラシ案の発表が行われました。

今回はアートサイトPR班を代表して宮島教授に岩室に行って頂き、前回に加え新しく５案が提示されました。前回の発表以降、岩室をより前面に押し出す為にテーマを「美流（びりゅう）」から「岩室美流」としました。チラシ案は、いわむろのみらい研究会の方々の投票により決定されました。１度目の投票により３つの案に絞られ、更に２度目の投票を行い、わずかな差で今回のチラシになりました。

チラシの原案者、小薗優さんは「つなぐ・受け継ぐ・創り出す…という「手」のイメージが頭に浮かびましたが、そういう象徴的な意味合いをあまり感じさせない「手」のグラフィックを目指しました。去年の作品達へ敬意を表しつつ、更に発展したものになって欲しいという期待を込めました」と、デザインに対する思い入れを語りました。

（文・小林つぶら・小薗優）

▲チラシのプレゼンを行う宮島教授

▲ ＜チラシ表紙＞ 黒い背景の中に前回の作品が浮かびあがっています。また、右側には赤いラインを象徴的に配置。いろいろな手の姿を入れています。

コアグループが今考えている岩室のみらいのかたち

コアコンセプト

コアグループは、今回のプロジェクトを通して岩室の地域活性化を進めていく為の軸となるコンセプトを検討しています。

このコンセプトはこれから先、岩室の皆さんと共にさまざまな活動をしていく上での指針となる大切な役割を持っています。

［伝統＋革新］

身近でありながら奥の深い温泉文化をもっと知ってもらいましょう。開放的な温泉地を提案します。岩室に残る文化は温泉の町としての要素を含んでいます。遊里、宴会、癒し、もてなし、その歴史と温泉を核に革新［＋α］を加えて未来に繋げていきます。

［結びの里・岩室］

食、文化、人の三点を軸に据えてみました。人と人との繋がりや今あるものはもっと育っていくように、またよいものは残していけるように、新しい出会いや文化も積極的に取り入れていきたいと思います。岩室に残していきたい素朴さを「里」という字に込めました。

おむすびを結ぶ→「食」
帯を結ぶ→「文化」
縁を結ぶ→「人」

［繋がりあう岩室］

岩室は、古くは弥彦参りの折に立ち寄る温泉地として栄えた宿場町でした。その当時から地元ならではの「おもてなし」がありました。地元の幸を使った郷土料理や優雅な芸妓さんたち、松岳山の雄大な山並みは旅人の癒しになっていたのではないでしょうか。そうした歴史・風土・文化の魅力を最大限に活かしながら、さらに地域として、新しい風を生み出していくことが出来るか。その大前提として岩室に暮らす人々全体が、繋がり合い、活性化していく必要があります。観光・農業・商業・漁業・さまざまな産業に関わる人たちが手を取り合い連携できるネットワークづくりを目指します。

みらいを考える

富士山の見える会議室で岩室の未来を探り始めてから約2ヶ月が経ちます。私たちは上の3案に辿り着くまで、様々な検討を重ねてきました。

ある週は列挙したキーワードを分類し、ある週は各自が想うテーマをプレゼンし、また車座になって思いつくままに意見を言い合ったこともあります。しかしなかなか納得できるまで絞り込めずにいました。

12月に入り、イメージする色と形容詞を使った表と岩室文化の年表をまとめ、散らばっていた情報を再確認しました。今は見えてきた3つの方向性でグループに分かれて更に検討し、言葉にする作業をしています。12月22日のプレゼンテーションまであと少し、気合いの入る毎日です。

（文・和田瑛里）

ムサビの風景

第２回 アシスタント編

松原有希さん
小倉壮平さん

本プロジェクトは、プロジェクト科目・専門科目・課外教育活動の３つの授業形態で活動しています。その中で私たちアシスタントは全体進行のお手伝いをしています。

私、松原はムサビの基礎デザイン学科を卒業してからプロダクトデザイナーを経て、前回のアートサイトで弦楽四重奏に出演したご縁でこのプロジェクトに参加することになりました。もう一人の小倉君はムサビ建築学科在学中の２００３年第１回アートサイトからずっと参加していて、岩室が第二のふるさとになりつつあります。

この仕事は、岩室やムサビでたくさんの方々と関わることができて、私たちも日々刺激を受け成長できるやりがいのある仕事だと思っています。このご縁を大切に、岩室のみなさんとムサビがより充実した関係を築けるようお手伝いしていきますので、よろしくお願いします。では、小倉君からひと言どうぞ。

小倉「岩室大好きっス。」

（文・松原有希＆小倉壮平）

公式ホームページがついにできました。

「いわむろのみらい」創生プロジェクトの公式ホームページができました。本プロジェクトの概要や目的、今後取り組んでいく計画がわかりやすく公開されています。もちろん活動報告も随時更新してお送りします。岩室温泉との交流の写真で彩られた素敵なホームページを、ぜひご覧になってください。岩室観光協会のホームページからも閲覧できます。

（※ホームページアドレスは下記にございます。）

編集後記

前回、編集後記では伝える事の大切さを・難しさを痛感したと書きました。しかし今回は編集に直接携わる中で、伝えるには具体的にはどうしたらいいのか、実現する方法は様々だということを感じています。

岩室やムサビにおいて今も進行しているプロジェクトを伝えるためこの「いわむろのみらい新聞」を作成しています。伝えたいことは沢山あるのに、ただ情報を並べるだけでは上手くいきません。しかし伝わらなければ話にならない。より伝わりやすくする為には、こうしたほうが良いという技術や方法というものが世の中には存在しているということもこの編集を通して知ったのです。

今回このプロジェクトのホームページが新しく開設されました。これもまた伝えるための道具であります。私は日々を何気なく過ごしていたので気付けませんでしたが、ずっと人は何かを伝えるということの為に様々な努力をしていたんですね。この新聞を編集しながら私は、世の中とはまことにコミュニケーションで成立しているのだなと、しみじみ実感した次第です。

（第４号編集担当　伊井洋貴）

▲編集風景の一コマ

■発行
「いわむろのみらい」創生プロジェクト
いわむろのみらい新聞編集部
第４号編集担当　伊井洋貴
■連絡先
武蔵野美術大学／研究支援センター
〒 187-8565 東京都小平市小川町 1-736
Tel & Fax 042-342-7263
■プロジェクトホームページ
http://www.musabi.ac.jp/iwamuro/
ⓒ「いわむろのみらい」創生プロジェクト 2006